

## 研究ノート

## 通学合宿への取組み

## ——大谷地東チャレンジ合宿の実践——

藪内 豊

## 目次

- I. はじめに
- II. 通学合宿とは
- III. 大谷地東チャレンジ合宿の概要
- IV. 大谷地東チャレンジ合宿の効果
  - 1. 対人コミュニケーション
  - 2. 生活自立度
  - 3. 身体的自己概念, 自尊感情の変化
  - 4. 子どもたちの感想
- V. まとめ

## I. はじめに

現代に生きる子どもたちは、屋外で活動したり、外で遊んだりということが少なくなってきた。この背景には、テレビやニュースで騒がれている事件などからもうかがえるように、親が子どもを安心して外で遊ばせることができないといった社会的な環境の変化や、テレビゲーム・インターネットの急速的な普及といった文化的・生活的環境の変化が大きく影響している。また、日本の少子化問題は深刻さを増し、大勢の兄弟の中で揉まれて育つということもほとんどなく、核家族化も相まって異年齢の人との交流が極端に少なくなっている。このような子どもを取り巻く環境の変化は、子どもたち自身の心身にも変化をもたらし、子どものいじめ、引きこもりなどの社会問題につながっているように思わ

れる。これは、急激な環境の変化により、子どもたちが他人と適切なコミュニケーションをとる機会が不足してきたことも一因として考えられる。

このような問題の解決策の一つとして、「通学型合宿」が考えられる。通学合宿とは、学校に通いながら、家庭生活の部分を他の子どもたちや地域の大人たちと共に共同生活するというものである。他人と共同生活することは、必然的に適切なコミュニケーションが求められる。また、通常、自分の家庭では行なわない家事なども、共同生活の中では自分の役割として求められるため、社会的な役割を担うことになる。このように共同生活の中には、机上のものではない体験的な「学び」が数多く内在している。

本稿では、2005年度に北星学園大学・合宿集会所を拠点として実施した通学合宿「大谷地東チャレンジ合宿」の概要を報告し、この合宿の効果について検討する。

## II. 通学合宿とは

通学合宿とは、異年齢の子どもたちが地域の施設で寝食を共にしながら学校に通う活動のことである。これは、1983年に福岡県庄内町で実施された5泊7日(2泊3日と3泊4日の2回実施)の「長期(通学)キャンプ」

---

キーワード：通学合宿, 子ども, 大谷地東小学校, 北星学園大学

がはじまりといわれている(正平, 2001)。その後、庄内町では「町立生活体験学校」という社会教育施設が設置され、今では年間20回程度の通学合宿が実施されている。この庄内町での取組みをモデルとし、近年では全国的な広がりをもって展開されるようになってきた。現在、全国で行われている通学合宿のプログラムには、「自炊」・「風呂・部屋の清掃」・「自由時間」だけの日常生活体験に絞ったものから、これに「ボランティア活動」、「家畜の世話」、「堆肥作りや野菜作り」等の地域特有の各種体験を加えたものまで、様々な形態の通学合宿が行われている。

一般的な通学合宿では、公民館などの地域にある施設を活用して、一定の期間、異年齢の集団の中で協同生活を営み、掃除、洗濯、食事作り、遊びといった日常の活動体験を通して子どもの自立・成長を図るものである。しかし、これらの活動目的は、子どもの成長に限定されるものではなく、実施形態の工夫によっては、地域に存在する教育資源を掘り起こし、その地域の持つ教育力を活用することも可能と思われる。

そのため今回企画した「大谷地東チャレンジ合宿」では、この活動を通して、子どもと地域住民、そして大学が連携を持ち、一つのものを作り上げることも目的の一つとして考えた。

この通学合宿では通常の就学時間帯に学校に通いながら共同生活をするので、子どもたちへの負担も少なく、また、合宿終了後もこの合宿で経験・学習したことが、そのまま日常生活の中でも活用されやすいと思われる。この活動を通して、子どもたちの社会性、自主性、協調性を伸ばし、いわゆる「生きる力」を育むことが期待されている。

### Ⅲ. 大谷地東チャレンジ合宿の概要

名称：参加小学校の名称である「大谷地東」

と、今回のプロジェクトのキーワードのひとつであり子どもたちにもわかりやすく親しみやすい言葉である「チャレンジ」から「大谷地東チャレンジ合宿」と命名した。

参加者：大谷地東小学校の4～6年生約350名を対象として、小学校を通して通学合宿の案内書を配布した。また、父母を対象とした説明会を実施し、合宿の主旨の理解を求めた。その結果、11名(男子9名、女子2名)の参加があった。

実施者：子どもを預かり共同生活をするには数多くの支援者が必要であった。昨今の子どもたちに対する事件を鑑み、登下校や買い物にも複数の学生を配置した。主体的に活動を行った2名の学生以外に、12名の学生の協力を得て実施した。

実施時期：2005年6月20日～26日の6泊7日とした。これは、小学校の行事予定を優先し、運動会と修学旅行の間になるように設定し、多くの参加を期待するためであった。また、合宿終了1ヵ月後の7月26日にも合宿集会所に集合してもらい、レクリエーション活動と心理テストを行った。

大谷地東チャレンジ合宿のねらい：この合宿のテーマ(キーワード)として「チャレンジ」「自立」「自律」の3つを掲げた。「チャレンジ」は合宿の名称にも使われている。これは、合宿中には、様々なことに積極的に取り組み、自分自身が描いている殻を打ち破り、自分の可能性を広げてもらいたいという思いから採用した。「自立」は、通常的生活では家族の他の人に任せがちなことでも自らが引き、子どもの自立心の養成を目指すためのものであった。「自律」は我慢が出来ない子どもが増えているということも聞いていたため、共同生活では自分の気持ちや行動をコントロー

ルする必要があることから、この言葉を選んだ。

活動場所：北星学園大学の合宿集会所を中心に活動を行った。この合宿集会所には、宿泊室、研修室、調理場・食堂、風呂などの共同生活に必要な施設が全て備わっていた。また、運動・レクリエーションでは、大学の多目的グラウンドや隣接する大谷地の森公園を使用した。ほとんどの活動は大学内で行うことができたが、唯一、買い物は近所のスーパーなどを利用した。

活動の概要：合宿期間中のスケジュールについては図1の通りである。以下では主な活動について、その内容を紹介する。

仲間作り、アイスブレイキング：約1週間の共同生活をする上で、最も大切になるのが参加者同士、参加者と実施者（スタッフ）との間の人間関係である。これらの人間関係がうまく築けないと、その後の活動でいくら良

い内容のものを実施したとしても、十分には吸収されないものになってしまう。そのため、開校式直後に仲間作りを目的とした種々の活動を行った。まず、屋内で自己紹介も兼ねた自己紹介ポスター作りを行った。これには、顔写真の他に、氏名、ニックネーム、好きなこと、嫌いなこと、この合宿での目標などを記入してもらい、みんなに覚えてもらいやすいように廊下に張り出した。ポスター作成後、身体を動かす遊びをする方が、様々な交流が図れると考え、屋外にて鬼ごっこやだるまさんがころんだなどのレクリエーションを行った。遊びの中で子ども同士の意見が衝突するような場面もみられたが、適切な交流ができ、子ども同士、あるいは、スタッフとの間のコミュニケーションも促進された。

炊事、洗濯、掃除：共同生活の中で必要な仕事については、仕事を分割し、班による当番制で行った。当番制となった仕事は、朝食準備、朝食後片付け、買出し、夕食準備、夕食後片付けであった。洗濯は班ごとに協力し

6月20日 月曜日	6月21日 火曜日	6月22日 水曜日	6月23日 木曜日	6月24日 金曜日	6月25日 土曜日	6月26日 日曜日
	6:30 起床 朝食作り 朝食 8:00 学校へ	6:30 起床 朝食作り 朝食 8:00 学校へ	6:30 起床 朝食作り 朝食 8:00 学校へ	6:30 起床 朝食作り 朝食 8:00 学校へ	6:30 起床 朝食作り 朝食	6:30 起床 朝食作り 朝食 片付け
	小学校	小学校	小学校	小学校	遊び	11:00 閉校式
13:00 開校式  仲間作りゲーム 当番決め	15:00 合宿所 遊び 夕食買出 夕食作り洗濯	15:00 合宿所 遊び 夕食買出 夕食作り洗濯	15:00 合宿所 遊び 夕食買出 夕食作り洗濯	15:00 合宿所 遊び 夕食買出 夕食作り洗濯	13:00 夕食大会の準備	
18:00 夕食	18:00 夕食	18:00 夕食	18:00 夕食	18:00 夕食	18:00 夕食大会	
19:30 風呂 勉強・自由時間	19:30 風呂 勉強・自由時間	19:30 風呂 勉強・自由時間	19:30 風呂 勉強・自由時間	19:30 風呂 ミーティング	19:30 風呂 後片付け	
21:30 子ども就寝	21:30 子ども就寝	21:30 子ども就寝	21:30 子ども就寝	21:30 子ども就寝	21:30 子ども就寝	
スタッフミーティング	スタッフミーティング	スタッフミーティング	スタッフミーティング	スタッフミーティング	スタッフミーティング	

図1 大谷地東チャレンジ合宿スケジュール

て行った。掃除については、自分たちの宿泊している部屋は自分たちで行い、その他の共用スペースも手の空いている子どもたちが行った。

班別活動：参加者が11名であったことから、活動の効率化と仕事がない人を出さないために、2班（A班、B班）体制で活動を行った。時には班内の協力がなくてできない課題を設けて、班内のメンバーの一体感を高めるように働きかけた。

登下校：昨今、子どもをターゲットとした事件が頻発していること、途中に大きな幹線があることを考え、登下校には必ず複数のスタッフをつけることにした。また、学校側の配慮もあり、下校時間を統一することができた。

絵日記：合宿期間中、子どもたちに毎日日記をつけてもらった。それは、子どもたちにその日の出来事を振り返ってもらい、その日の反省と次の日に向けての目標作りのためであった。記入後はスタッフリーダーに提出し、そのリーダーたちはコメントバックするようにした。最後に1週間分を冊子にして、後日、子どもたちに返却した。

夕食大会：この合宿の中心的なプログラムとして夕食大会を行った。これは、合宿終了前夜の夕食を班ごとに献立段階から作成するというものである。合宿期間中の朝・夕食も子どもたちに作ってもらうようにしたが、これらの献立については、あらかじめスタッフで相談したものであった。最初の食事づくりでは、初めて包丁を手にする者も少なくなく、子どもにとってはこれまでにない体験のようであった。そのため、それまでの5日間の食事作りを通して、少しであるが調理のスキルも向上していた。そこで、この成果として夕食大会を企画した。ここでは、予算や時間が決められている中で、班ごとで相談をしてメニューを決め、買出しに行き、調理するというものであった。そして出来上がった料理を

みんなで食べるというものであった。A班のメニューは、「○×餃子とキムチチップスエッグチャーハン」であった。○餃子は普通の餃子で、×餃子は一般的には入っていない具が入っているものであった。一見、○か×分からず、たとえば、チョコレートなどが入っていたが、子どもたちは喜んでおいしそうに食べていた。キムチチップスエッグチャーハンとは、チャーハンの中にキムチ味のポテトチップスが入っており、ピリッとした辛味が特徴であった。一方のB班のメニューは、「そばろ弁当、ザンギ、チョコレートパフェ」であった。

#### IV. 大谷地東チャレンジ合宿の効果

大谷地東チャレンジ合宿の効果を測るために、種々の心理テストを実施し、また、参加者などから感想文を書いてももらった。

使用した心理尺度は、対人コミュニケーション、生活自立度、身体的自己概念、自尊感情に関連するものであった。測定は、合宿初日（6月20日）、合宿最終日（6月26日）、合宿終了後1ヶ月（7月26日）の計3回実施した。調査対象者が11名と少ないことから、統計的な処理は行わず、図表から差異について考えた。

感想文については参加者11名の他に、全協力スタッフや一部父母からも提出してもらった。

##### 1. 対人コミュニケーション

今回、対人コミュニケーションの測定に使用した尺度は、以下の10項目であった。

1. 初対面の人ともすぐに仲良くなれる
2. 集団の中でも意見を言える
3. 友達に対して思いやりがある
4. チームワークを持って行動できる
5. 1人で遊ぶよりも、友達と遊ぶ方が好きだ
6. 友達でも間違っていることは注意できる
7. 自分と違う意見の人とも話すことができ

る

8. 自分と学年が違う人とも話ができる

9. 大勢の前で何かするのは得意だ

10. 人の意見を聞くことができる

図2は、3つの測定時での対人コミュニケーション尺度の得点を示したものである。図2より、項目番号1, 2, 3, 4, 7の項目は、いずれも合宿初日から合宿最終日にかけて得点が大きく向上し、1ヵ月後の測定値は合宿最終日との比較ではやや低下するものの、初日との比較では向上がみられる。また、6, 10の項目は初日→最終日→1ヵ月後と順調に値の向上がみられた。合宿期間中に身につけたことが、元の生活に戻り、さらに自分のも

のとすることで得点の向上として現れたのであれば幸いである。しかし、低下した項目もあった。項目5であるが、これはももとの得点が非常に高かった影響とも考えられる。

今回、取り上げたとした対人コミュニケーションスキルという内容は子どもたちに限らず、人間が生活を行っていくうえで非常に重要であり、絶えず成長できる部分である。しかし、この対人コミュニケーションスキルは一人では決して学ぶ事ができないものであるため、非常に難しいスキルとも言える。本調査においては、1週間の通学合宿において、コミュニケーションに関する能力の向上が、質問紙のレベルでも確認できた。このことは、

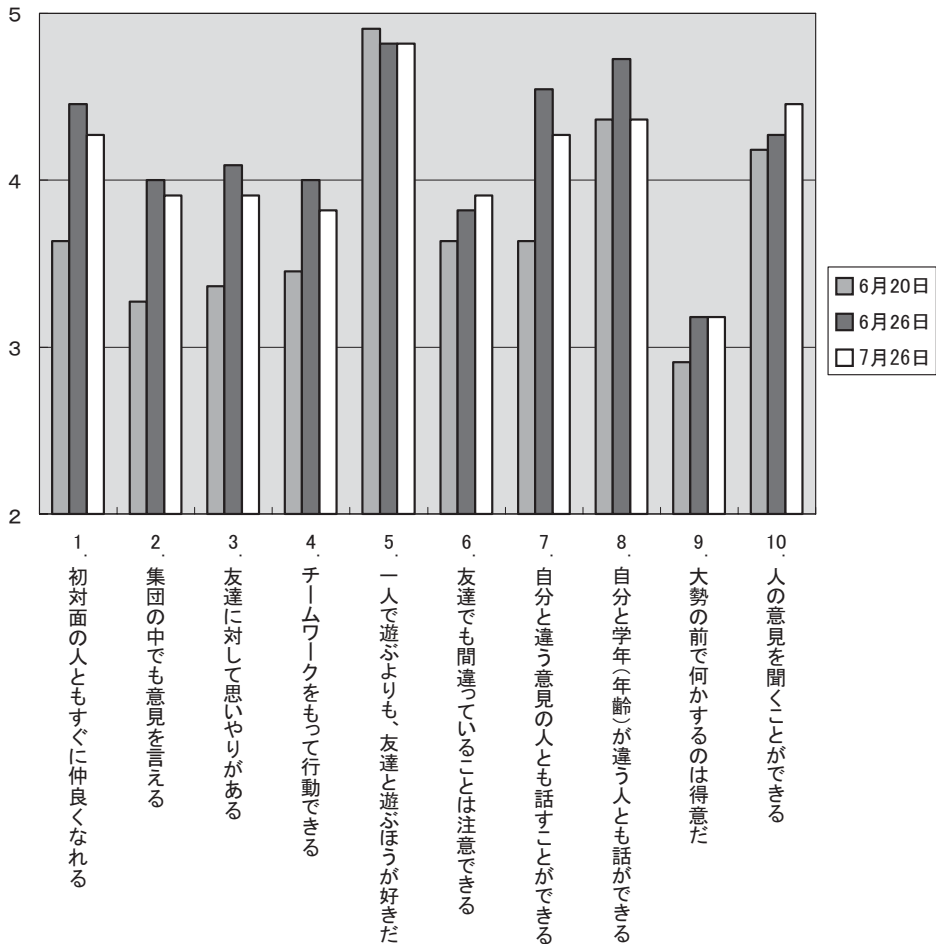


図2 対人コミュニケーションスキルの変化

本稿の冒頭でも述べたコミュニケーション能力の改善・向上に通学合宿が寄与することを示す結果であると思われる。

## 2. 生活自立度

生活自立度の測定に使用した尺度は、以下の8項目であった。

1. いつも自分の持ち物は整理せいとんしておく
2. 一人で自分の計画をたてる
3. 家ではすすんで勉強に取り組む
4. 食べた後の食器は自分でかたづける
5. 毎日、その日の反省をする
6. 料理が得意だ
7. 毎朝、自分ひとりで起きる

## 8. 自分の部屋は自分でかたづける

図3は、3つの測定時での自立度尺度の得点を示したものである。図3によると、5、6、7の項目が合宿期間を通して大きく向上したことがわかる。6、7の項目は、普段家庭の中では自分で行わないことが合宿中に習得されたと思われる。また、5の「毎日、その日の反省をする」や2の「一人で自分の計画を立てる」は、合宿中に身につけたスキルを、日常生活場面でも活用していることが考えられた。

## 3. 身体的自己概念、自尊感情の変化

身体的自己概念尺度（養内，2002：7 因子21項目）および Rosenberg（1965）の自尊感

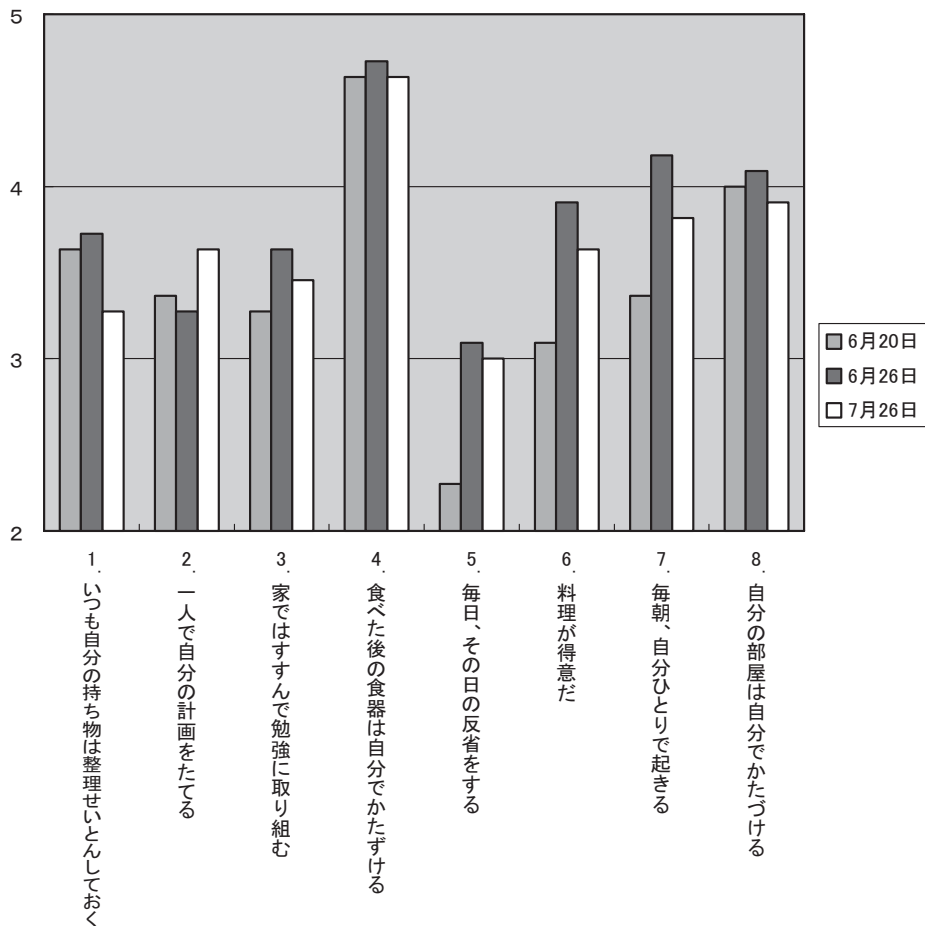


図3 自立達成度の変化

表1 身体的自己概念、自尊感情の変化

測定日		運動	筋力	元気さ	健康	体型	疲労感	身体全般	自尊感情
6月20日	平均	10.36	7.64	11.45	9.00	7.45	9.82	9.82	26.82
	S D	1.75	1.86	0.93	1.41	1.21	1.78	2.04	3.09
6月26日	平均	10.45	8.18	11.09	9.09	8.36	9.45	8.91	27.36
	S D	2.02	1.54	1.38	1.22	1.91	2.50	2.34	5.33
7月26日	平均	10.36	8.64	11.27	9.27	8.64	9.73	9.18	28.36
	S D	2.01	1.63	1.10	1.19	1.57	2.24	2.18	4.50

情尺度の日本語版を使用し、変化をとらえた。

表1は3回の測定日ごとの11人の平均値および標準偏差を示したものである。調査対象者が少数のために統計的な手法を用いていないが、「筋力」「体型」の身体的自己概念の下位尺度と「自尊感情」の得点では時間の経過にしたがい得点の向上がみられる。「運動」「元気さ」「健康」「疲労感」の身体的自己概念の下位尺度ではほとんど変化はみられなかったが、唯一、「身体全般」尺度のみ低下している傾向がみられた。

今回使用した尺度は、いずれも成人、高校生以上を対象に作成されたもので、小学生を対象に調査するには文言の表現が難しく、小学生にとっては理解しにくいものであった。そのため、今後の調査では尺度の工夫が必要と思われた。

#### 4. 子どもたちの感想

11名の参加者全員から合宿終了後に感想文を提出してもらった。その中から印象的な部分を抜粋して紹介する。

A君：「ぼくがチャレンジ合宿で楽しかったことは、料理を作ったことでした。」

B君：「でもつらかったのは、けがした時とかけんかとかの時です。まちがえてもだちの心をきずつけてしまいました。でもすぐ仲なおりをしたのでよかったなあと思いました。」「このがっしゅくはやればできるんだよって教えてくださいました。」

C君：「スタッフの人にもおこられました。おこられた理由は、話している人がいるのに

聞いていなかったこととか、部屋がきたないことだとか、やればかんたんにできることをやれなかったことなど、いろいろありました。でも、日がたつにつれあまり注意やおこられることが少なくなりました。その理由の一つには、A班が自分たちのめあてを作っていたからかもしれません。」「このように、大谷地東チャレンジ合宿で、学んだ事、楽しかった事、つらかった事などを通してぼくたちは、成長していったと思います。」

D君：「ぼくは土曜日が1番楽しかったです。」「一週間、使った合宿所が、こわされてしまう。(きたないけど) 悲しいね。さようなら。」  
E君：「みんなで30分勉強しました。すごく勉強はみじかいな一と思いました。しゅうちゅうしていたからです。」

Fさん：「料理では、自分たちで買い物に行ったり買い物をして買ったものを、あらったり切ったりまぜたり焼いたりしてみんなで協力して料理を作りました。家でも、おみそしるを、作ったりしています。」「家では、テレビの周りや床をふきました。最近では、7時少し前に起きるようになりました。」

G君：「ぼくたちもがんばったりょうりじぶんたちでつくるのは、すごくむずかしかったです。まいにちせんたく、りょうりとかすごく母さんたちってがんばってるんだなあと思った。だけどぼくたちだってがんばってるんだぞ、せんたくやりょうり、ぼくたちだって負けないんだぞー。」「一週間の中で心にのこったことは、みんなと力をあわせていかないと、生活していけないということです。自分かっ

てに生活するといけないということが、わかりました。ぼくもスタッフのように、りっぱな人になりたいです。」

Hさん：「夕食大会では、自分たちで、こんだてを考えて、自分たちで、買う物や、何ぐらい買うのかも、ぜんぶ、自分たちできめて、ちょっと大へんだったけど、楽しかったです。」

I君：「最初は『長いなあー』と思ったけど、あっという間の一週間でした。料理、洗濯、早起きなど大変だったけど友達と一緒にだったからがんばれたし、楽しかったです。また、来年も合宿に来たいです。」

J君：「合宿中一番楽しかったのは最後の日に皆で外で遊んだことで、大変だったのは、朝の朝食当番でした。でも皆で夜おそくまで話したり、〇〇、〇〇、〇〇さんたちに会えてよかったです。」「家に帰ったらさっそくチョコパフェを作りました。なかなかこうひょうでした。」

K君：「次は、自分の仕事です。とても大変で、親の気持ちが、わかります。」「夕食大会が始まると、いきなり、自分達で、買い物です。買った後に、料理です。うまく作れて、スタッフにも、『おいしい』などのことを、言われてうれしかったです。」

## V. まとめ

地域の子どもの心身の発育・コミュニケーション能力の向上を目的として、6泊7日の大谷地東チャレンジ合宿を企画・実施した。北星学園大学の合宿所を宿泊場所とし、地元の大谷地東小学校の小学4～6年生に対して参加を呼び掛けところ、11名(男子9名、女子2名)の応募があった。合宿期間中、子どもたち自身が自分の食事作り、掃除などの日常生活に必要な家事を行った。また、子どもの心身の成長を促すようなプログラムも取り入れた。合宿初日、合宿最終日、合宿終了

後1ヶ月の合計3回の心理テストを実施し、心理的側面から通学合宿の効果を測定した。その結果、対人コミュニケーション、生活自立度といった要因の向上がみられた。全参加者から提出してもらった感想文からも、子どもたちはこの合宿を肯定的に受け取り、合宿で学んだことを自分の家庭に持ち帰り、活動を継続していることがうかがえた。

### 【参考文献】

- 月刊公民館 (2001) 通学合宿の原型・庄内町の先駆的实践ー地域ぐるみでの子育てを実感する大人たちー。月刊公民館, 534:10-16.
- 木ノ原元美 (2005) 生活体験通学合宿が地域にもたらしたものー北九州市立枝光公民館・市民福祉センターにおける4回の実践を通してー。日本生活体験学習学会誌, 5:63-71.
- 正平辰男 (2001) 福岡県庄内町「生活体験学校」の施設と運営ー民間と行政の新たな連携が育てた「通学合宿」ー。日本生活体験学習学会誌, 1:49-58.
- 藁内豊 (2002) 運動・スポーツに対する自己効力感と自尊感情の関係。平成12～13年度科研費成果報告書。課題番号12870033。P57.
- 大田典之 (2005) 山口県宇部市における通学合宿によるまちづくり。日本生活体験学習学会誌, 5:81-88.
- 尾山信行 (2002) いしかり・子ども宿。社会教育, 57(7):22-25.
- 青少年野外教育振興財団(編) (2002) いしかり・子ども宿。青少年野外教育振興財団。

### 謝辞

この合宿の実施にあたり、多くの本学学生の協力を得て遂行することが出来た。特に、本学文学部心理・応用コミュニケーション学科卒業生の高橋佑一、菊田直人の二名には多大な協力を得た。また、参加してくれた大谷地東小学校の子どもたち、実施に快諾をいただいた津田幸明校長先生、その他協力をいただいた方々に感謝したい。

なお、この研究は、2005年度北星学園大学特別研究費の補助を受けて実施された。



[Abstract]

A Life Experience Training Camp :  
Going to School from a Community Lodge (Tsugaku-Gasshuku)

Yutaka MINOUCHI

A life experience training camp in which children went to school from a community lodge (Tsugaku-Gasshuku) during a period of 7 days and 6 nights was attempted to enhance the sound minds and bodies and communication ability in local area children. The children stayed at the retreat house of Hokusei-Gakuen University. A total of 11 children, 9 boys and 2 girls, in the 4th~6th grades of Oyachi-higasi Elementary School took part in the camp. They came back to the university retreat house from school instead of returning to their house. They did most of the house keeping duties themselves during the camp. Psychological measurements were conducted 3 times to assess the camp effects on psychological changes: at entry, at the end of the camp and 1 month after the camp. It appeared that communication and independent abilities increased during the camp period, and some of their improvements were maintained after 1 month. Furthermore, it was also indicated in written responses collected from all participants that the children kept up the practices they learned in the camp.

---

Key Words: Life Experience Training Camp (Tsugaku-Gasshuku), Child, Oyachi-higasi Elementary School, Hokusei-Gakuen University